

柳生博光とロバート・クロックが初めて出会った夜に深く語り合ったのは、どのようにすれば世界は平和になるのか、という議題についてだった。共通の行きつけであるところあるバーで出会ったふたりがそんな会話を繰り広げた場所は、中野坂上を流れる神田川沿いのベンチだった。ほんの二時間前まで降り続けていた雨で路は濡れ、おかげで空気は冷ややかだった。梅雨明けまで待ったなしと報道されている。

車のライトが反射した。

駅から徒歩で離れていくふたりはさっきまで入っていた店で飲んでいた酒の味を語り合う。

やがて神田川にまで行き着くと、どちらともなく川沿いの道に入った。道脇には桜の木が建ち並んでいる。今は立派な葉桜だ。葉先、枝先に揺れる雨粒がぼたぼたと落ちた。

「何か買っていきましょう」

「いいね」

柳生が提案し、ロバートが快諾した。前者はチョコアイスを、後者は野菜ジュースを買った。

そこから少しも歩かない場所にベンチがあった。今回もまたどちらともなくそこに座った。

ほとんど同時だったのかもしれない。雨露をふたりは気にしなかった。互いが互いのそんなところを、また気に入った。

座ってから、それぞれが買ったものに口をつけた。離れた車道を走る音が水を跳ねる音が聞こえる。三度目のそれが聞こえてから、ロバートが流暢な日本語で話し始めた。

「結局は、人という種の倫理観が明確な成長を遂げられていないことが問題だ」

「……人類が二千年経いても変わらないのならもうそういうものだと断定してもいいような気がします」

「明日…、は無理だとしても、私が死ぬ頃に進歩できないとも限らないだろう」

「希望的観測過ぎます」

「君は悲観的過ぎる。まだ若いんだもつと楽観的であつてもいいと思うが……」

「いつか諦めるなら、それを見越して早いほうがいいと思いませんか」

合理的過ぎる。ロバートはそう言いかけた。しかし留まった。

「個として見れば人のほとんどは希望そのものだ」

「知っているつもりです。ただ、社会性という切つても切り離せない性質が内在した弱さを引き出してしまっている」

柳生の目に何かしらの強い意志が鈍く光ったのを、ロバートは見た。かつて一度は抱き、そして愛を得た時に切り離れたものを見たような気がした。

「じゃあなんだ、社会というくくりを解体でもするのか」

「今のままじゃ大きすぎますから」

今度是我慢できずロバートはぱつと口を開いたが、「冗談です」という言葉と柔和な笑顔がその先を紡ぐことを阻んだ。柳生の手は固く握られていた。それは誰にも見られなかった。